



発行日 = 2004 年 2 月 25 日 発行人 = 面出薫 編集 = 田沼彩子・平岩洋介
照明探偵団・事務局 〒 150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内 (田沼彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail=tanteidan@lighting.co.jp http://www.lighting.co.jp/tanteidan/

照明探偵団通信

vol.18 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外調査レポート

ライトアップは誰のために？

/ イタリア的非日常演出術

～イタリア・ローマ / フィレンツェ～

国内調査レポート 1

薪能舞台に見る和のあかり - 竹田薪能

～大分県 竹田市～

国内調査レポート 2

京都將軍塚

～京都府 東山～

照明探偵団倶楽部活動 1

街歩き報告 (10/17 品川セントラルガーデン)

照明探偵団倶楽部活動 2

研究会サロン (10/29) 報告

照明探偵団倶楽部活動 3

街歩き報告 (1/20 LaQua)

照明探偵団倶楽部活動 4

研究会サロン (1/28) 報告

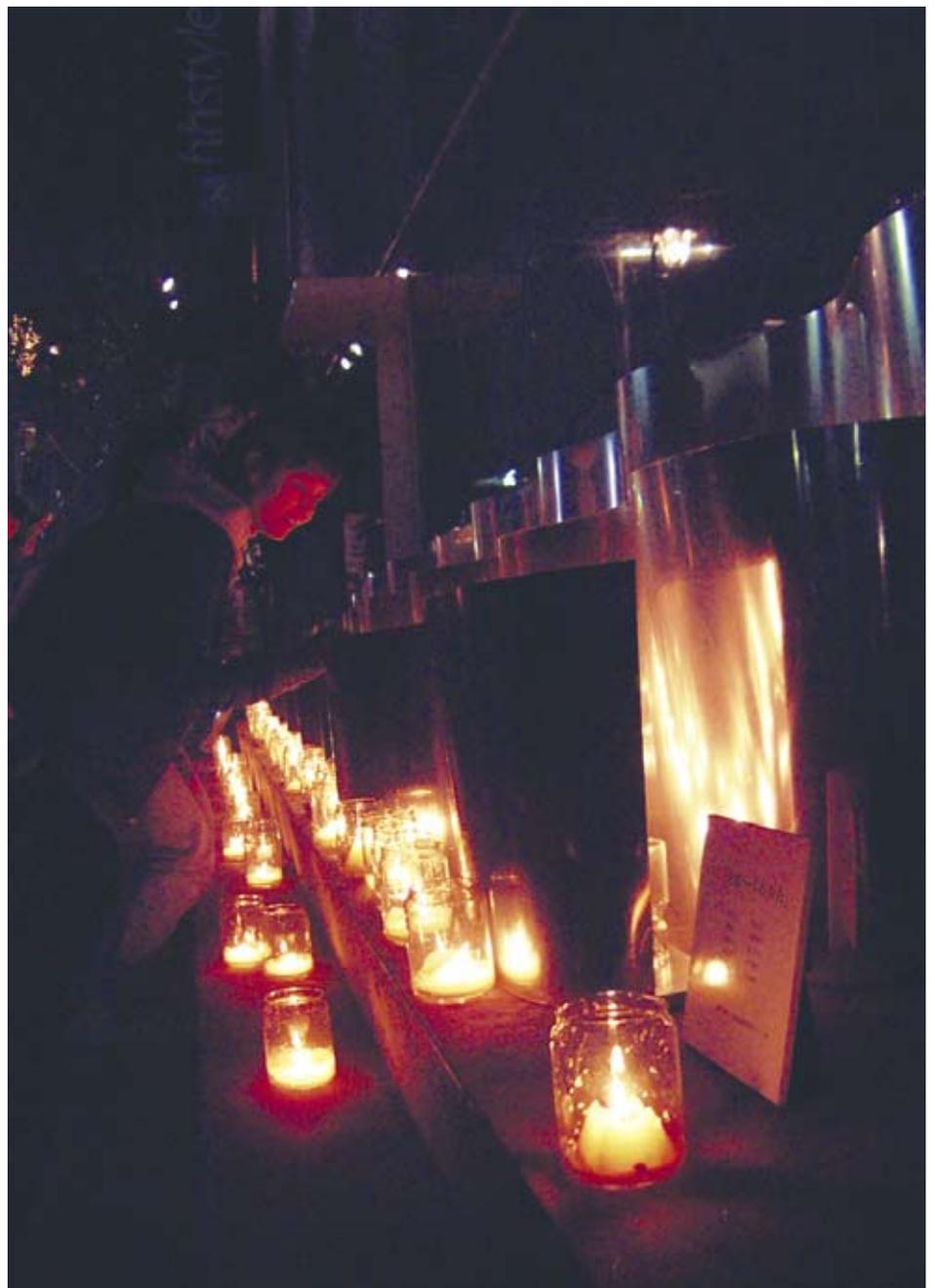
照明探偵団倶楽部活動 5

『100万人のキャンドルナイト

@ 原宿キャットストリート』開催！

面出の探偵ノート

照明探偵団日記



100万人のキャンドルナイト @ 原宿キャットストリート

ライトアップは誰のために？ / イタリア的非日常演出術

イタリア / ローマ・フィレンツェ 2003/10/05-11

窪田麻里 + 橋本八栄子



世界中の都市を調査し続けている照明探偵団が意外にも未だ未調査であったイタリアの古都、ローマ・フィレンツェ。今回は全くの観光客の視線で出会う光の景を中心に調査を行った。世界有数の歴史観光都市は、どのような光で訪れる人々をもてなしてくれるのだろうか。

■ランドマークとしての光の景

ローマには至る所にライトアップの対象となる建物やモニュメントが点在している。細い路地を抜けた先に見える鉛直面の光は、訪れる人々を暖かく迎えてくれる。坂が多い街並みのランドマークとしても効果的だ。しかしながらこのライトアップ、手法としては少々乱暴だ。向かい合った建物の壁面に直付されたワイド配光の投光器で対象物を大ざっぱに

照らし出している。結果、街中の至る所に存在する投光器が常に誰かにグレアを与えているといった具合。住宅の窓のすぐ横に投光器がはりついているといった事態も少なくない。ランプは、土色あるいはレンガ色の建物には決まってナトリウムランプのオレンジ、石などの白っぽいファサードにはメタルハライドランプの白、というように被照体の仕上げ色によって色温度を使い分けるのが主流のようである。いずれにしても面的でベタツとした印象だ。

■背景としてのライトアップ

観光のスポットとしてははずせないのは動線上の結節点となる広場である。広場は決まって教会や公共の建築物に面しており、日中はもちろんこの建築物を目当てにここを訪れる人も多い。これらの建築物は広場の正面であり「主役的」存在である。しかしいったん夜が訪れるとこれらは閉館と同時に巨大な面を広場に残すことになる。そこに先述の大ざっぱな光が施されると日中の「主役」は一転、夜間の「背景」となり、人々はその「背景」を前に、広場で思い思いのナイトライフを繰り広げる。それはレストランやカフェでの長く楽しい夕食だったり、似顔絵を描いてもらった思い出をつくる観光客だったり、大道芸の

演出だったり屋外映画鑑賞会だったりするのだが、それぞれがアクセントとなる光をもって「背景的」ライトアップの上に(正しくは手前に)配置される。広場全体は主張しすぎず、薄化粧だけを施して、そこにアクセサリがちりばめられるのをまっているかのようだ。人々こそ主役といった光景は、旅先での「非日常」をさりげなく居心地のよいものに演出してくれているのだ。

なるほど、見られることを意識してしっかりメイクアップした「主役的」ライトアップは人の営みと関係のないところにしか存在しにくいかもしれない。サン・ピエトロ寺院もしかり、コロッセオもしかり・・・。



街中に突如現れるランドマーク



主役的ライトアップ 人のアクティビティは殆ど見られない



広場で繰り広げられる人々のアクティビティ

■非日常的な視点から

フィレンツェの旧市街は一日で歩いてまわれるほどごんまりとしている。フィレンツェの主立った観光動線となっている街路は、高さ20m程度の5～6層の建物に挟まれるようにして構成される。ここではポール灯やカテナリー照明は使われておらず、夜間の明るさは建物上部壁面に直付けされた大きな投光器によって確保される。幅はだいたい30～40センチ、器具の左右には黒く塗られたバンドアもついている。ポール灯がないおかげで店舗の前は遮るものもなく、幅10mほどの街路はすっきりとした印象なのだが、昼間の景観としてはいかがなものか。夜間は図らずも向かい合う建物の壁面を互いに照らしあうウォールウォッシュの機能を果たしている。あの窓の向こうは住宅だというのに……。

旧市街を2分するように流れるアルノ川沿いには、クラシックなデザインのポール灯が等間隔で並んでいる。ランプがむき出しとまでは言わないが見た目にも眩しく、暗い川面を背景にひととき強い輝度を放っている。しかしながらこの眩しいポール灯も、遠い丘の上から望むと適度に川沿いの建物を照らし出しながら、単調になりがちなフィレンツェの夜景にリズム感を与えているのがよく分かる。近くから見上げるとローマ同様大ざっぱにライトアップされたドゥオーモも、遠くから望むと適度な輝度をもったヴォリュームとして浮かび上がってくる。遠くから見た光の景は、街なかで体験したそれよりもずっと好印象だ。

調査の最終日に夕暮れ時のドゥオーモの鐘楼にのぼってみた。徐々に暗くなっていく街並みを見下ろしていると、赤い屋根の建物によって深く削られた街路の底に、あの大きな投光器の光がたまっていく様子が浮かび上がってくる。この時間のこの瞬間に、高さ82mから街を見下ろす数少ない人のためだけにあの照明は計画されたわけではないだろうに、しかしながら美しく輝きを増す路底を見下ろすにつけ、あの上方向にグレアレスな照明は、この場で非日常を愉しむ限られた人のためにあるように感じられたのだった。こちらを照らし上げているあの投光器をのぞけば……。



こちらを照らし上げている投光器

■ライトアップは誰のために？

わたしたちのような来訪者の視点からは嬉しい夜の広場空間、高いところから望む夜景はとても印象的で旅の思い出となる光景だ。それにしても投光器を壁面に取り付け、お互いに照らし合っている建物に住んでいる人々は、どんな思いでこの投光器とつきあっているのだろうか。この街を慕って訪れる人々の非日常的な視点を、日常の中で快く演出してくれているのだろうか。

(橋本 八栄子)



街路照明用投光器



底に光をためた街路



丘の上から望むフィレンツェ全景

薪能舞台に見る和のあかり - 竹田薪能

大分県竹田市挾田 三日月岩前 水上舞台 2003/10/18-19

田沼 彩子 + 井元 純子

屋外でかがり火などの人工光でないあかりを使って行う薪能が少し前から全国的にブームとなり、各地で頻繁に開催されるようになった。屋内の舞台で行われる通常の能と比べて、薪能は会場によって舞台のつくり方や客席の取り方、そしてあかり取りとなるかがり火や松明の設置方法にそれぞれ個性がある。今回私たちが取材にでかけた大分県竹田市の喜多流竹田薪能は、市内を流れる稲葉川上流に組まれた水上能舞台で断崖絶壁を背景に行われることで知られる。独特な自然環境を活かして行われる能が、燃える炎でどのように演出されているのか、興味を持った。

■断崖絶壁に囲まれた能舞台へ

熊本空港からさらに1時間半ほどバスに揺られて、竹田市へ。都市景観大賞「美しいまちなみ優秀賞」を受賞しているだけあって、古い白壁の武家屋敷などが残される趣ある町並みが続く。町の中心部を抜けてゆったりと湾曲して流れる稲葉川沿いに上流へ向かって歩くこと約20分。

高くなった土手の上から川を見下げながら歩けるようになっていて。会場に近付くと歩道の空き缶にオイル芯を入れただけのシンプルな竹筒の松明が等ピッチで並んでいたが、それ以外にはこれと言った照明器具は見当たらない。辺りが暗闇に包まれたらこれが道標になるのかも・・・ということ想像しながら会場へと向かう。会場となる能舞台は川を切り立った断崖絶壁に囲まれるようにしてあった。



火入れの儀式



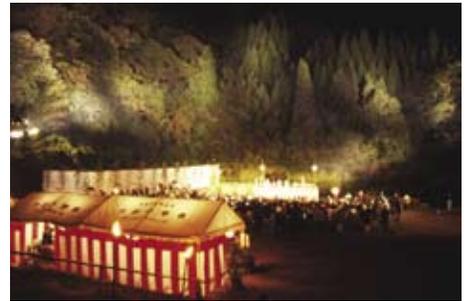
かがり火と能舞台

■数々のあかりの設え

そろそろ里の夕暮れ、という雰囲気漂い始めた16時過ぎに開演。まずは背景となる絶壁の一部に掘られた穴に火を入れる儀式が行われる。これは元禄時代に掘られたという三日月型の穴で、前には障子が貼られている。能舞台の脇から松明を持って小舟に乗った人が対岸の絶壁に向けて櫓を進める。対岸に着き絶壁の間の小道を通って三日月に火を入れた。まだ周囲が明るいのははっきりとはわからないが、火の揺らめきが薪能の舞台にひとつ加わった。かがり火は能舞台の左右に用意されている他、会場内にもいくつか設置されている。しかし、能舞台に対するベースのあかりを取るのにはビームランプのスポットライト。やはり“薪能”とは言っても人工光全く無しで、と言う訳にはいかないようだ。

■和のあかりが演出する幽玄の世界

日没の頃になって会場のかがり火の全てに火を入れる、“火入れの儀式”が行われた。辺りの闇が濃くなって来るに従って、水上の能舞台が浮かび上がる。舞台や演者の動きが水面に映り込む様子が、幻想的な雰囲気を増す。演者は面を着けているので本来なら表情は見えないはずだが、微妙な面の向きによって感情を表す。揺れる炎越しに見ると、絶海の孤島に一人取り残された僧の屈折した心境などはより切迫した感じに見えてくるから不思議だ。クライマックスで赤と金の衣装を着けて舞う演者。これまで“和のあかり”と言うと静かなイメージばかりだったが、この舞



土手の上から会場全景を望む



観客は幽玄の世界に引き込まれていた



能舞台を照らすスポットライト

台からは燃え盛る激しい火もまたそのひとつだということを感じた。

舞台が終わってとつぷりと暮れた川沿いの道を歩く。来る時に見つけた竹筒の松明が点々と闇夜に灯って行きとは全く異なる景色が目の前に広がっていた。技術の進歩によって、舞台照明でもよりリアルに、見えないものを見るように、ということが可能になっている。ただ、人工光ではつくり得ない舞台があるということも確かだ。燃える炎にしか表現できない幽玄の世界が今あえてもはやされるのは、舞台を見てみて実感することができた。今回の薪能では人工光がかなり使われてしまっていたのが残念だったが、今度はかがり火だけでつくられた舞台も見てみたい。

(田沼 彩子)

京都将軍塚

京都府・東山 2003/10/23

澤田 隆一 + 早川 亜紀

東京では夜景を眺めるポイントが多くあります。東京タワーや高層ビルの上階、最近では六本木ヒルズの森タワー、さらにはヘリコプターから…。それに対し同じく日本を代表する都市、京都では、それほど多くの人が都市のスケールで夜景を眺めていないのではないでしょうか。今回は京都の夜景を撮影するため、東山山頂にある将軍塚を訪れました。

「将軍塚の展望台」には2種類あります。一つは市営の展望台。もう一つは青蓮院門跡、大日堂の将軍塚庭園内にある展望台です。共に京都市街を山頂から望むことができますのですが、青蓮院の展望台のほうが抜群に良い眺めです。そこには美しい庭園を抜けた先に、清水寺の舞台のようなダイナミックな展望台がそびえ立っています。上には階段状のステージが広がり、京都市街を一望できる贅沢な展望スペースとなっています。

夕暮れ時に訪れ、ちょうど向かいの西に広がる比叡山の峰に日が落ちてゆくのを眺められました。太陽が山に隠れる直前には、傾いた低い日差しが街の建物の屋根を照らし、一直線に光のラインをつくっていました。太陽が落ちると、西の空が赤く燃えて山がシルエットになり、街の光が徐々に増します。「やまぎは」が空の光、「やまのは」が山の間で縁取られ、美しいコントラス

トのある日暮れの光景でした。眼前に広がるパノラマの京都の眺めは、場所ごとの特徴をそのまま語った夜景をつくっていました。左（南）から順に、京都駅の航空障害灯、その右に京都タワーのライトアップ、七条、六条、五条と通りの光があり、一際明るく光が溢れているのが四条河原町周辺です。さらに右（北）のほうへ上ってゆくと闇の一角があり、そこが京都御苑であることが分かります。

桓武天皇が平安京をこの土地に定めるとき、将軍塚から四方の地形を展望して都に適した土地を感じたということです。平安京のスタートの地と言えるのでしょうか。訪れたのは風も強く空気の澄んだ日だったので、夜景もクリアにきれいに見えしました。京都が都だったころの街並み、そしてその夜景（真っ暗なのでしょうか）を眺めてみたいものだなあと思いを馳せながら、寒さに凍えながらの撮影でした。

（早川 亜紀）



日没の低い日差しを受けて光る屋根と街並み



将軍塚庭園のダイナミックな展望台



階段状のステージのような展望スペース



京都のパノラマ夜景

第20回街歩き

2003年10月17日

品川セントラルガーデン

新幹線駅も開業し、コマーシャルで耳につく「ピーアンビシャス〜」の音楽が流れる品川駅を抜けて、再開発の進む品川エリアを歩きました。

駅前に林のようにそびえ立つ高層ビル群は、5棟のオフィスビルと2棟の住宅棟から成ります。その中央には幅45m、長さ400mのオープンスペースで、木々やベンチが配されたくつろぎの空間“セントラルガーデン”が広がります。駅から続くペDESTリアンデッキ“スカイウェイ”はこのガーデンをぐるりと取り囲んでおり、デッキレベルから、グラウンドレベルから、と様々な場所からガーデンを望め、視線が行き交うのがこの空間の特徴でしょう。

セントラルガーデン上を横切る2つのブリッジは、足元のインジケータライトと天井のリニアな蛍光灯の照明により構成されました。手摺部分がシースルーな素材のため、ガーデンに対してオープンで気持ちの良いビューを提供していました。

ブリッジ上の照明に限らず、グラウンドレベルでも蛍光灯を使ったライン状の照明が多く見られます。地中埋込みのインジケータライトは少しまぶしく、また一定のレイアウトなので少しカタイ印象を受けました。なんだかU字溝のようなベンチの下にも1本ずつ蛍光灯器具が取付けられています。他には木のライトアップなどがあり、全体的に背丈の低い照明器具を用いたヒューマンスケールな照明でした。

セントラルガーデンの奥、住宅棟側にナチュラルローソンがあります。通常のコンビニエンスストアとの差別化を計るためでしょう、蛍光灯は全て電球色です。手元で約1500ルクス。確かにランプ色を変えるだけでもだいぶ印象は異なると思いますが、明るさや雰囲気づくりなどもう一工夫できればナチュラル度はもっと増すはずです。

今回は、武蔵野美術大学の学生も参加し大人数での街歩きとなりました。懇親会では冷えたカラダをお酒であたため、食事と会話をにぎやかに楽しむことができました。

(早川 亜紀)



1



2



4



3



5

1. セントラルガーデンをデッキから望む
2. グラウンドレベルのベンチ照明
3. セントラルガーデンを横切るブリッジ内部
4. 電球色のナチュラルローソン
5. 恒例の集合写真